



全員に1年の海外留学を義務付ける「英語で学ぶ大学」

◆ビジョンはグローバル人材の養成

国際教養大学は04年に秋田県に開学した全国初の公立大学法人であり、英語による授業のみで卒業できる数少ない大学である。1学年の定員は150人と少人数教育を柱とし、教員の半数を外国人が占め、さらに1年間の留学を義務づけるなど従来の日本の大学にない特色を有している。学生の出身地をみると、秋田県のある東北地区が全体の4割強を占めているものの、他はほぼ全国から満遍なく学生が集まってきていることがわかる(図表1)。

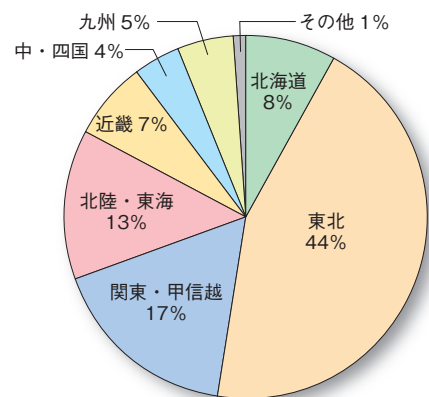
大学の理念として「国際教養=インターナショナル・リベラル・アーツ」を掲げ、英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と豊かな教養、グローバルな専門知識を身につけた実践力のある人材を養成し、国際社会と地域社会に貢献することを目標としている。その背景には国境を越えたグローバル化が進む時代において、多様な価値観や世界観を認め合い、さまざまな問題を解決する力が求められていることにある。

同大が4年間の大学教育を通して養成を目指している人材像は以下の3つである。

- ・ 外国語力や異文化理解などの総合的なコミュニケーション能力を有する人材
- ・ グローバルな知識を共有し、現代の諸問題の解決に貢献できる人材
- ・ 国際社会において活躍できる個性的で実践力を備えた人材

同大の源島福己准教授兼キャリア開発室長(以下、源島・キャリア開発室長)は「国際系を含めて大学に4年間いても、まともな英語を使えないと言われて久しいが、本学

図表1 出身高校都道府県別学生数



では4年間で英語力を徹底的に鍛え、英語をツールとして使える人材に育てます。同時に実利的な学問だけではなく、様々な分野の授業を提供し、幅広い教養を身につけることにより、将来の専門性獲得に向けた意欲を高め、グローバル社会で活躍できる懐の深い人間に育てたいと考えています」と語る。



源島福己 准教授
兼キャリア開発室長

同大のキャリア開発室は就職ガイダンスや迅速な企業情報の提供を通じて、学生一人ひとりの個性に合ったきめ細かな就職支援を目指している。キャリア開発の柱は①職業意識、職業選択能力や学習意欲、社会貢献意識を涵養する「キャリア・デザイン」授業、②国内外の企業での「インターンシップ」、③異文化体験を通して幅広い教養、コミュニケーション力、環境適応力を養う「海外留学」——の大きく3つからなる。

前述したようにグローバル人材の養成という明確な人材育成ビジョンに基づく教育内容は、企業が求める人材像と重なるものであり、教育の一環である海外留学もキャリアデザインのための重要な要素と位置づけている。

◆「英語で学ぶ」大学

前述したように在学中の授業はすべて英語で行われ、「英語を学ぶ大学」ではなく「英語で学ぶ大学」であることに同大の特色がある。入学後は1年次に全員が「英語集中プログラム」(EAP)で英語運用能力を徹底的に磨く。EAPを修了した学生は基本的な教養科目を修得し専門課程への準備を行う「基盤教育」(BE)に進む。基盤教育は他の大学でいえば一般教養科目に相当する。基盤教育修了後は専門教育課程に進む。

専門教育課程はグローバル・ビジネス課程とグローバル・スタディズ課程に分かれる。グローバル・スタディズ課程は「北米研究」「東アジア研究」、それに世界の異なる地域をまたがって幅広い事象を学ぶ「トランスナショナル研究」の3つの分野に分かれる。また、専門教育課程では最低1年間、海外の大学に留学し、留学中に専門科目などを履修する。

英語集中プログラムは入学時の英語力をおよそTOEFL®450点を目安に教育。英語力などに応じて3段階の能力別クラス編成を行い、話す、聞く、読む、書くという技能に加えて、講義の聞き方、ノートの取り方、ディスカッションやプレゼンテーションの技術、大学での論文のまとめ方などについて学習する。そして次の基盤教育課程に進む要件としてTOEFL®500点を課している。

実際の入学時の学生のTOEFL®の平均成績は今年の場合が482点、春の学期(7月)終了時は538点と好成績を収めている(図表2)。

同大ならではの特徴の一つが少人数による米国式の授業である。1クラス15人以下を基準とする授業は、ディスカッションやディベート、プレゼンテーションへの参加を通じて自ら考え、主張できる能力を養う。さらに学生数に対する一人当たりの教員数も多い。

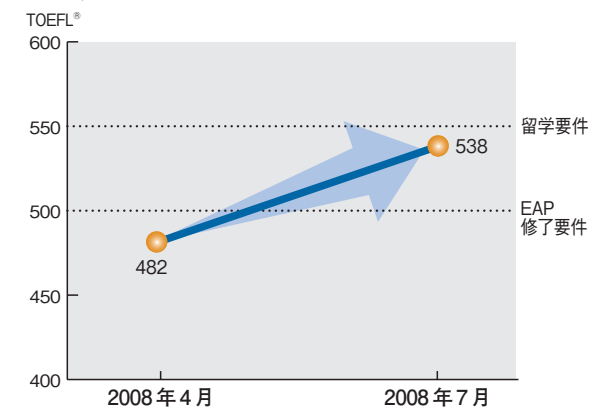
「学生数は留学生や大学院生も含めて756人ですが、106人が留学中であり、実際の教員一人あたりの学生数は10.6人になります。小学校の分校ではないですが、教員も学生もお互いを知っており、密接なコミュニケーションを実現しています」(中津将樹広報・入試室長)

また、1年生は入寮を義務づけており、寮生活を通じて留学生をはじめ学生同士の交流を図っている。大学内の図書館は24時間オープンにしており、寮と図書館も近く、最適な勉強環境を整えている。

さらに、入学後、すべての学生にアドバイザーを割り当てる「アカデミック・アドバイザー制度」を導入している。アドバイザーは受講科目や専門課程の選択など学習プランに関する質問、授業以外の大学生活の悩みについて相談に乗る。アドバイザーはEAP、基盤教育、専門教育で

さらに、入学後、すべての学生にアドバイザーを割り当てる「アカデミック・アドバイザー制度」を導入している。アドバイザーは受講科目や専門課程の選択など学習プランに関する質問、授業以外の大学生活の悩みについて相談に乗る。アドバイザーはEAP、基盤教育、専門教育で

図表2 TOEFL®スコアの推移(2008年4月入学者)



教えている教員が担当する。また、毎週一定の時間に学生が教員の研究室に出入りできる「オフィス・アワー」を設定。授業に関する質問や勉強方法の相談もできる。

◆ 留学の1年間で25~30単位を取得

専門教育課程に進むと1年間の留学が義務づけられている。ただし、海外留学の要件としてTOEFL®550点の取得が必要になる。留学先は同大が提携する世界28カ国・地域に広がる79大学であり、学生の希望を調査し、成績、TOEFL®スコアなどを判断した上で決定する。したがって留学するのは必ずしも3年生に限らず2年生でも可能である。

留学先の提携大学で受講する授業はすべてその大学の一般学生のために開講されている授業となる。多くの学生は同大で履修した基礎科目の応用編や留学先国の言語や文化に関する科目を履修している。留学中は30単位程度の履修を目標としている。

「たとえばグローバル・ビジネス課程の学生が留学した場合、その大学のビジネス専攻の学生が履修する正規科目を勉強し、単位を取得するのでかなり大変だと思います。しかし、本学の学生は留学中に平均25~30単位取得しています」(中津広報・入試室長)

留学の要件であるTOEFL®550点はTOEIC®でいえば800点前後に相当する。当然ながら留学後はさらに点数が高くなる。



秋田杉を使用した24時間使える図書館

「就職活動に当たって女子学生10人にTOEIC®を受けさせたのですが、全員が900点を超えていました。最も高い学生が950点。その内7人が910~930点のレベルに達していました」(源島・キャリア開発室長)

◆ インターンシップで気付きを与える

前述したように同大のキャリア支援の柱は、キャリア・デザイン教育、インターンシップ、海外留学の3つで構成されている。留学中の就職支援策として、メールによる学生一人ひとりの相談にのるほか、海外で開催される就職フォーラムへの情報などを提供している。

キャリア・デザイン教育では基盤教育科目として「キャリア・デザインⅠ」「キャリア・デザインⅡ」を開講し、学生の職業意識の涵養を図っている。やはり少人数教育を基本とし、1クラス20~30人。1回の授業が100分、15週におよび毎週レポート提出を課している。授業のカリキュラムはキャリア開発室が中心となって作成。その内容はキャリア理解、大学での学習方法や目標設定、就職活動の心構え、働くことの意義、国内外の雇用情勢などについて理解を深めるものになっている。科目は2単位であり、必修になっている。授業は源島准教授兼キャリア開発室長が中心となって実施する。

「初回に大学の理念について改めて勉強します。以降は社会人基礎力、リーマンブラザーズ破綻による社会や個人レベルでの影響、格差社会について学習しました。その月にJETROやJICA等外部の講師を招いての貿易白書の読み方、さらに次の週はVPI検査を通じて職業興味を考える授業、またニート・フリーター問題や学生同士によるライフストーリーインタビューを行い、自分を振り返る授業もやりました」(源島・キャリア開発室長)

そのほか、さまざまなワークショップを通して、書類作成方法、企業訪問のマナー、面接の対応方法などテーマ別に絞った情報提供も実施している。

2年次にはインターンシップを前に個人面談を実施している。その目的は「どういうインターンシップ先を希望しているのかを把握し、受け入れ先の発掘に協力するとともに、本人の職業観や将来の夢についての話し合いを通じたアドバイスを」(源島・キャリア開発室長) ことにある。

インターンシップは、キャリア・デザイン科目の受講を通して早期に職業教育を身につけた学生を対象に、2年生の夏休み以降に2週間~3ヶ月の範囲内で実施される。インターンシップ先は当初は大学主導で開拓したが、今では学生自身が探してきて実施することを原則にしている。

インターンシップ先は民間企業だけでなくボランティア団体、民間企業、官公庁と多岐に渡っている。地域も首都圏、学生の出身地、秋田県内、留学先の海外と幅広い。

「商社のシカゴ支店、あるいはアメリカの中古車ディーラーや農場、タイのプーケット島のホテルなど海外でもやっています。また、秋田県内の白神山地や北海道の知床地方で自然保護活動をやった学生もいます。学生の出身地の県庁や介護施設で行う学生もいます」(源島・キャリア開発室長)

同大のインターンシップは実際の就職とリンクするものではなく、職業に対する気づきを与えるという授業の一環である。期間中は毎日の活動成果を日誌に記入し、最終的にインターンシップ先のスーパーバイザーの修了証明書とレポートを英文で提出しなければならない。修了後は授業でその成果についてプレゼンテーションを行い、単位を授与する。インターンシップの意義について源島・キャリア開発室長は「最初はホテルで働きたいと思っていた学生がインターンシップを通じてまったく違う方向性の仕事に目覚める場合もあります。違う仕事の体験を通じて自分で本当にやりたいことは何かについて考えるきっかけになる」と指摘する。

◆ グローバルカンパニーへ多数内定

同大は04年の開学であり、08年に初の卒業生を送り出した。学生数140人に対して進学および就職希望者数は64人。うち53人が就職を希望し、全員が就職している。修業年限内の卒業率は47.1%と低い。「一番大きな理由は海外留学期間が3年生の9月以降から翌年5~6月であり、就職活動時期と重なり、翌年の就職を目指して自主留年した学生が多い」(源島・キャリア開発室長)ためである。

2年目の09年卒業予定者のうち就職希望者の内定者は110人とほぼ就職率100%を達成している。しかも2年間の就職および内定先は、大手総合商社をはじめ製造業でも日本を代表するグローバルカンパニーが多数名を連ね

ている。卒業1期生しか出していない大学としては極めて異例ともいえる。

もちろんそうした実績の背景にはキャリア開発室の地道な活動もあった。

「05年に私が着任して以来、とにかく大学を知ってもらおうと考え、数多くの企業を訪問しました。キャリア開発室として1年に100社訪問の目標を立て、これまで400社以上を訪問しています。最初はインターンシップの機会を与えていただきたいとか、御社が考える採用戦略における人材像について意見交換させてほしいと持ちかけるのですが、聞いたこともない大学だということでもくれない企業が多いと。お会いいただいた企業の方には本当にありがたく感謝しています。その都度ぜひ大学を見てほしいとお誘いし、大学での企業説明会の開催をできるだけお願いしています」(源島・キャリア開発室長)

企業と学生の接点となる個別説明会を毎年10月から3月にかけて実施している。企業説明会の参加企業リストを見ると、商社、電機メーカー、食品、消費財、製薬をはじめとする錚々たる企業ばかりである。2年目以降になると企業の側からぜひ参加させてほしいという声が増えているという。大学に対する企業の評価について源島・キャリア開発室長はこう語る。

「説明会の後に学生との質疑応答の時間を必ず設けてもらい、学生の質を見てもらうようにしています。そうすると学生も真剣で私語もないし、質問もよくしてくれるという声をいただきます。うちの学生のどこに注目しているかを聞くと、言語の運用能力以上に教養だと言われます。また、留学を通じた異文化体験や英語での厳しい授業等何かをやり遂げた精神力にも注目しているという評価もあります」

英語力修得や海外留学という苦難を乗り越えて勝ち取った幅広い教養力が同大の魅力になっているようだ。同大は来年3月に2期生を送り出す。「卒業生が実際に働いて本当に役に立つ人材であると評価されることが大事」(源島・キャリア開発室長)と指摘する。卒業生たちが企業の現場で実績を残すことで大学の評価も定着していくことになる。同大で培った学生たちの国際教養力が企業社会でどういう成果を実現してくれるのか、大いに期待したい。 ■

(溝上憲文 ジャーナリスト)